



函館漁港・船入潤防波堤

イカ釣り漁の基地としても知られている函館漁港（入舟漁港）には、1899年に完成した石積み防波堤が現存している。監督技師は小樽港の建設で有名な廣井勇博士で、建設にあたっては、旧砲台（弁天岬台場）解体の際に発生した石材を利用している。当時をしのばせる貴重な土木遺産といえる。

て仕上げた。旧金森洋物店では、壁の隅角や窓まわりに石積み形やアーチ形をつくりだして、文明開化時代らしいデザインにされた。このれんが・白漆喰は函館のお気に入りになったようで、明治中期の太刀川商店（1901年／重要文化財）はこの手法で、重厚な土蔵造りの意匠を主としながら、よく見るとアーチのような洋風も取り込んでいる。明治末の旧金森船具店（1911年／現金森美術館）はルネサンス風のデザインでつくられている。

函館は大火の町として知られる。1934（昭和9）年の大惨禍で最後になったが、先にふれた明治11、12年のあと、明治40年、大正10年と市街の中枢を焼き尽くす大火に襲われた。そのつど街は立派に再興されてきたわけだが、結果として焼失域ごとにそれぞれの時代の特色が街並みに刻印されることになった。

西部市街は大半が1907（明治40）年の大火で失われた後、明治末から大正初めにかけて再興された。ただし弁天町の方は一部が焼失をまぬがれ、わずかではあるが大火前に建てられた木造の建物が残されている。また元町・末広町のあたりから宝来町方面は大正10年に焼けていて、宝来町「銀座街」はこの大火後、防火帯として再興された。それも当時は日本でも最先端の鉄筋コンクリート、同ブロック造りで建てられた。



街の主役と脇役たち

西部の街並みを歩きまわると、まるでスベクタクルでも観ているかのように、明治・大正・昭和各時代の衣装をまとった名優たちが次から次と登場してくる。主役も脇役もそれぞれに個性豊かな。

主役の一番手は旧函館区公会堂（1913年／重要文化財）であろうか。鮮やかな青みと黄色というペイントが意表をつく。正面二階のベランダは外見も華やかだが、ベランダに出て基坂を通して海を見下ろす眺望がなんとも豪華だ。

近くには、ロシア正教会のハリストス正教会復活聖堂（1916年／重要文化財）がある。エキゾチックな役柄で人気度ではトップかもしれない。そのすぐ下にはゴシック様式のカトリック元町教会（1924年）があるし、東本



民家の保存に向けて市民と行政が連携しながら取り組みを進めている。

Data



●お問い合わせ先

函館市教育委員会文化財課

伝統的建造物群保存係

Tel. 0138-21-3456

函館市観光課宣伝係

Tel. 0138-21-3323

願寺函館別院の大屋根が見えている。東本願寺の伽藍は日本で最初の鉄筋コンクリート寺院としても知られる。さまざまな宗教が肩を寄せ合っている姿は、開放的な開港場の気風をよくあらわしている。国際的といえば、旧イギリス領事館（1913年／現開港記念館）や旧ロシア領事館（1908年）がある。中華会館（1915年）も忘れるわけにはいかない。こうした主役に混じる脇役がまたすごい。和洋さまざまな商家や住宅がびっしり建っている。ユニークなのが一階は格子戸の伝統的な構えなのに、二階が下見板ペイントに縦長のガラス窓をおき、立派な軒飾りをまわすという上下和洋折衷デザインの町家である。庶民の工夫をしやれた姿で表わした建築様式といってよい。